

滑
菟
和
合
人

四
編

上

13
3128
13



へ 13 特
3128
13



滑^{なめ}石^{いし}和^に公^ぎ人^{にん}四^よ編^{へん}序^{しゆ}
 能^よく人^{ひと}と交^{まじ}り遊^{あそ}ぶ者^{もの}は老^{らう}子^しの如^{ごと}く
 同^{どう}塵^{じん}とらひ當^{あた}り時^{とき}を懸^かるは合^あせ境^{けい}と
 以^もつ郷^{きやう}に瀧^{たき}亭^{てい}の親^{おや}玉^{たま}和^に公^ぎ人^{にん}共^{ども}
 を一^{ひと}に知^し終^{つひ}る者^{もの}官^{くわん}とて知^し胸^{むね}を
 動^{うご}かすも和^に公^ぎ人^{にん}共^{ども}の思^{おも}ひの如^{ごと}く



東^{とう}坂^{ばん}一^{いつ}ツ木^{つぎ}丹^に平^{へい}集^{しゆ}記^き
 清^{せい}石^{いし}和^に公^ぎ人^{にん}四^よ編^{へん}序^{しゆ}
 本^{ほん}集^{しゆ}記^き



今年
江戸
志
碎



滑稽昔和合人四編卷之上

江戸 爲永春水作

寺の中を何の糸丸と思へば
 さきもせげけと歌い何のあがら
 を渡りい川も餘が瓢箪をおさ
 仲有り名は既小所存知の
 品川の宿をぶきあそく志を
 いふく何をうそを不を立出ると

和合人 矢場七 揚次郎 の六人
 和次さん 今日ハ



まゝ一度もお神酒がたぐらねくろ神さの面白くは
ごちよいとけいご、きんはけて性あをん何根
ごらう、のんまり不兼知を言ひそくお教もつえ
ねへ路吉へ中をまぐ、のんまり白ッ。のん教も中男不根
小崎落も地はも歩中ア根ねへ七場へイ白ッ。のん
とよ 徳者へ白ッ。のん六白ッ。のん度へ解らむ言のそ
関せ中。ソレ酒を吞ば目の測がのんのりと様色よ
あるハサ所を吞ねくろ教が白ッ。のんと言のそが魚

いり七場へイりいけ連中をざつとくあく極かん
下寧小見後、所がけ身あり知ら守中外の面白
白ッ。のんおんぞと六けと自懐かこつるぜマア黒ッ。のんとい
まッ。のんといとる言中ア下度お教もア矢場へコウく
七場公教色の洋茶あらお前も極分面白
方ある二十相接つて面白く面白く面白く
明もへ恥を持出さねへ中ふおるがのん中たま
今言のそまの何根まも和次さんハまをーん 和次



和歌山四ノ上

金屋



和歌山四ノ上

居ら戸揚次「左理でと強ぐ甲ラをテ小出さけると
思つて」まは二とお猪口の酒不用家のハ何の事か
「ヤリ」世話「ね」奴等とぞソレをうめいさげ揚次
「ヨリ」維そ酌ぬら矢ぞ「レ」酌ぐハ揚次「ヨ」ツト何み
ト「お」は香ぐ揚次「コ」ウサの酒ハ大さう暢が通り町ぶと
そのちの鴉子の酒をうめの平内とかつて呉んぬハ
「ン」むぐくこどつけるぞして通町と桑の平内とハ
とんど方角遠ひぞア揚次「ン」をぬめく「お」お茶漬ハ

一粒八文ツもさる中か玉の行をたづめて云集
三月考こつてこんかの酒蔵が出くたさる事あり
ア「我」あがら地老ふ生れはのこつる事揚次
「理」ぐおあささ「禪」へさ成へけるとおのつ
揚次「何」ある「一」吏でも痔者ぶといつらうヨ全作
痔者ハ尻をひきまのが一着と云ふぞ揚次「何
何を言ふのさ」け身と言つて地者とハ其又トヤ
ねハ地ハ小達者お者のまをいふのさ「い」どもあも

宿あつものふ^{いふ}を^しすると^は是^れふ^とま^るる^ど、知^り次^に「コウ
 揚^をを^宿と^ふ何^の更^ど揚^次「知^りて^は更^にサ^字を
 知^る者^者者^者「コウ^イく^ま更^にる^遠つ^く居^らア^字を
 書^ける^者者^者あ^ら毎^日づ^いお^おの^中ら^よ毎^日
 言^つち^や宿^前の^更ふ^ける^ふ「^まい^り氣^味く
 手^あが^何あ^も知^らぬ^解ふ^人の^更を^毎日^毎
 ヲツ^トお^おの^もる^遠つ^く毎^日づ^いお^おの^中ら^よ毎^日
 ホ^イ又^は身^のも^遠つ^くこ^りや^アえ^んか^和睦^く、^美ス^サ

和^睦か^らの^今さら^天概^本更^を切^りけ^くそ^ろく
 出^るけ^るへ^どめ^どろ^ろ、^まろ^ろろ^ろく^どお^おせ^川流^へ
 何^んか^年の^花の^更通^もそ^れね^くら^いと
 腋^に更^に地^を、^らく^く更^にと^困ら^アト^ミく^ふ
 是^ハ誰^かさ^あも^毎日^友有^がふ
 じ^やお^のよ^とて^左根^を、^右根^をと^りト^おま^り
 取^らぬ^から^しを^士揚^コウ^トキ^ニと^あが^何所^へ移^りで^居る
 の^ど、^今更^に神^奈川^流り^サ士^を「^神奈^川流^り

新編 日本書紀

アハ知りてゝるがし生さるや 兼見 後架の船板まが
まが大夏 七場 一人並ら〜 花が時らら 遍形あん
む大黃の心を知らんや。アけ身らちの目ら見
ち中やお茶の哉まごトキ神奈川ら生らるら
まごはくつものご 矢た 何でも海根と星のほくら
あくがりの中や 湯をアアさ〜 づめ金沢ら 縁をを
見物〜 江の島 一ちらつ〜 楊のハイ〜 それら
むらと何豆の湯治ら 富士へあつ〜 巻の序ら

何物と糸密ららナ和めが 京大坂と見物〜 糸一
撰伎の金昆舞らら四玉をまらつ〜 昔へ生序は様と
あつて 長傳らら 阿茶院へ渡つ〜 夜天竺と見物
あて 矢む 子宛ら 大概小法にッせ〜 糸運上げ 糸
らア 氣運上もまらる 様とあ 川らら
糸一 解〜 居るヨカウらま〜 糸一 母らら
糸一 糸運を冠れらら 冠らら 糸一 糸運上げ 糸
ハ大概 糸運ふあらら 居らら アト 川らら 糸一 糸運上げ 糸

和合人田心止



新編...
...
...

新編 浮城物語 巻之四 上

冷が森の隈をふらふ後乃 ハアセツ八山以殿ふ。出てん専らくら

より十二このく下地 鬼が出る 鬼トやあいの人の人トやりの人の言へ度空

いりの残さる とおろい、トやりの 後引くさる廿一

はく とおろい はくわ とおろい はくわ とおろい はくわ

あや とおろい はくわ とおろい はくわ とおろい はくわ

言い とおろい はくわ とおろい はくわ とおろい はくわ

元 とおろい はくわ とおろい はくわ とおろい はくわ

徳利をさびてゆく今まゝの茶碗をたたくとたたく
あやの橋人のくろくま
揚入

那をえぬ人花見ふでも出さず小徳又利を焼く

吞あがら道中にもあはく馬中からア余程気味不

手合さ 何と何の酒を吐き方へちた何びる

冷方へあるめへ 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き

せら 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き

そ 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き

き 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き

一 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き 吐き吐き

何なんぞお不ふ快かいくねねののどどきき「コウコウももどどめめくらくらん
 ああよよけけちち成なりははけけああんんふふいいせせぎぎはは身みがが首くび尾びとと
 一いももいい吞のちち〜〜いいおお子こああちちもも洒し落れややむむららははああねね
 へへ中ちゆうまま「志し中ちゆうままああららだだままつつ〜〜居い中ちゆう」
 志し中ちゆうままででももああんんままりりああいいままでで我が俣まががさされれねね〜〜セ
 大だい場じやう「志し中ちゆうままとと〜〜幸さい坊ぼうががいいののねね」
 言いふふららちちふふ値ち久く新しんうう売うりりああらら〜〜子こ〜〜ままれれがが
 茶ちや「志し中ちゆうままつつ〜〜男おとこ」
 ままででももああんんままりり〜〜い

〜〜志し中ちゆうままつつ〜〜精せいババねね〜〜ああららままるるががのの中ちゆう志し中ちゆうままれれ
 中ちゆうまま世せ話わのの中ちゆうけけ〜〜ままでで「ああんんままりり志し中ちゆうままつつ〜〜
 いいががまま〜〜ああらら〜〜アア「志し中ちゆうままいい」
 中ちゆうまま〜〜ままるる中ちゆう〜〜おお志し中ちゆうままがが入い〜〜完かん〜〜
 出いめめ〜〜ドド「中ちゆうままああららををぬぬらら〜〜見みせせ中ちゆう〜〜
 小こままああらら〜〜かかのの中ちゆうのの辺へりりああ失したた「モモシシ親おや方かたああららとと火ひをを〜〜
 ああらら〜〜ああらら〜〜ああらら〜〜
 おお志し中ちゆうまま〜〜中ちゆうまま「中ちゆうままのの火ひ〜〜ああらら〜〜打うち付つけて

何ぞよしのあまを「お茶をえんくまへ煙管を巻て居る
さるうら火が射く居ると思ひ中〜お徳〜打て
下まのちやアお茶の毒ご〜「おんのあ〜や実ハ
あ〜ひ草好じや〜かゝあ。いのも目お半斤ぐ〜ひ
呑まをま〜やそどやて〜毎日そあいは甘味吞でんあ
され果ハ草好〜身代つぶま。中〜あまおてもあつ〜
時めやあんまうり何あ〜しいお徳〜を処ぐ〜こあ〜いお
売煙管〜さ〜さ〜さ〜歩行よりますがあおのあおれで売とや

と思ふてもお煙管が入ると思や舞ハ心ありのぞ
煙管のあふても済があア〜「ア〜〜このはア 大出衆
〜「お茶が〜ア上方ご子孫〜「〜ア 徳〜當てや
あ〜「〜ごもの両個あ〜ら大政〜どや 徳〜
〜何でも大坂とあ〜み中〜「私も店の用〜
〜那地つも中〜「が肝の徳〜さ〜いあ〜ご子
〜定め〜お茶が〜も大坂ト〜ア 二条通り〜さ〜の
二条通りと〜いふのり子孫〜「イヤ大坂〜い〜あ〜いあ

和歌集 四ノ八ノ二

一八十一



和歌人四三上

町へ同まけん私どもが内へ長町トやが赤き「ツア
大坂の長町子まト申ア三勝の月の水近不づら
申七の縁切時分ハ悔お申す一かつら子孫
くりや出草申し「お江戸のお方の口合ハ早あて
めやあアトキニ火が打付申し「煙草何がりん
イヤラヤア態く有難ふど「お前も春あさら
ねへう「ハア左根あら一姉「イヤア甘良ハあめり
「いづくも火付がこころい「おん一姉「橋

舞いんち夫を「サリ「遠慮あ「お春あせ「今人の一
「いも一姉「お馳まふあろういおはたからと
「あふからまきて「居申し「お春「お前のねがも
「あめり中「こころ子孫入「ナニ「ガのハあめりやせんか
「まふ「何夜先刻うらかつ「居あさる「のど
「子孫入「それトやて「こあのお春入お封申あて
「さうい春ま申人トや「ハア「何を頼掛でも何
「こころ子孫入「イヤアトやあいがあま「や生れついで「暮が

和歌人四三上

四三上

あつた好むとあつた香居りやうとがよふ思ふこ
見ゆは是程費ふありあつた先服あら後が
ちり酒あら酔ひもまらすが羨むとて後の思ふ
あつたせず酔ひ日やいと申していふやういふ
処に朝三かき登りぬくおとろ三かきと極
申すあやむらうと忘れぬ香とやあつたといふ
お封ふあつた玉あつたドや思ふありや香行の香が
粉もやせぬとて香とや香年半ハ夫夫あつたがふ

申す替りお合ふお人の羨むとて香とや何れ
でも標やせんといふおと今一ぬくお馳せおあつた
お夫を「サア香あせんとて申す尾張町の内田が香
ろふといふ羨む通人といふおと申すけし香とて申す
お彼方でもあつた香とや申すおと申す「申す
情ねけし香とて申すおと申す香とて申す
おのろ香「ういおとてとて何文とて申す
おと申すおと申す「おと申すおと申す

香と申す

おと申す



一箇

酒
中
の
事

酒中



香
り
し
と
そ

ま
り
し
と
そ

水
の
淡
い

我
體
年
了
そ

は
り
し
と
そ

ら
り
し
と
そ

志やあア矢を「ハテ冥宝及よの有りとのみまをひ子
旅人「左りとよ何れやあ 矢を「子おまをッて「酒のま
サ旅人「ア酒のあ酒ありや飯より 好トやがあア
あるありやけ三根舞いんう 矢を「ハ三根やア用意
へねが中徳利のを一をいお合出出来かよめくろ子
旅「是うあところやいと中〜してやがあア矢を「か〜ら
でもあはでも構ひやせん一をいお呉あせん先刻〜ら
咽がぐ〜くあ〜く居やア旅「ハ咽が乾い〜くろ以あ

「交あ〜このあサア呑んせトリヤお砂〜て何ぶよ〜ら
あ矢を「イヤそりやア有難〜く 是へおめをとぶかり。ヨツト
何の中ま〜ト 茶碗ふ〜ツ 矢を「こりや〜大〜ろ 澄〜酒
ぶ〜ア焼酎うあト 言あ〜ら一合呑〜ヤ 矢を「ヒヤ〜こりやア
水ぶ〜く 旅人「ア氷のあね〜まアトやがあア矢を「おあ
あもあんまの〜る麻〜〜い物ふ〜も化され中ア あ
め〜徳利の中へ水を入〜何のま〜似〜ら〜 旅人「
何のま〜似〜でもありやせん〜いあ 旗〜る〜ろ〜ト 咽が

大正10年1月

17

乾きままのワレ中^{そのとら}的^を建^た場^ばへ^ま休^まん^ど茶^をを^の吞^のんで
 見^こえ^たそれ^を安^まず^ても^も二^{えん}文^んの^{ちや}茶^い代^い金^をあ^りま^せん
 何^も思^ひが^らい^はら^いの^もこ^のあ^いふ^は佳^い
 利^りく^水を^いろ^く後^ごあ^りま^があ^ら拾^つ好^やあ^あお
 子^もも^咽が^乾い^くあ^らあ^んが^楽ん^ん—^ても
 大^い変^じあ^ませ^んあ^らあ^りや^そこ^の茶^の井^をぐ^お襷^子
 智^ちり^ある^ます^こい^ふ何^ご程^どや^あ今^まも^のお^のめ^あま
 あ^らよ^う「^モヤ^サア^イ」^とお^解き^の枝^い—^ませ^んが^同て^果れ

ら^ア—^んど^目ふ^合せ^られ^こト

 此へ先刻よりわき—は我思ひく居らう—がこころをて大勢一度知
 ぬきぬ彼の方りの上方者のむらり—てそころをて行く
 矢む—へこ—ん—さ—此^ち走^そめ^あつ^てま^のめ^あま^い—^いお^鏡—^は
 菓^か入^いを^で売^うわ^て行^きま^あら^う—^茶—^いつ^でも^お茶^の
 ま^る茶^の大^大遣^ふあ^ると^をか^らく^と思^ひの^おサ^ウ云^云
 公^{こう}「^遠ね^く何^ど程^ども^夫場^ばに^水い^ろま^らう^らう^まバ^レた^ま
 く^け身^みが^あま^やが^あつ^てま^のえ^ねく^お—^て
 い^どめ^るあ^い「^サ—^く何^ど時^ども^首尾^び—^くあ^らう^ま

和合人四ノ上

十八

草書
一
伊
一
夜

ねんまのちのくろくろく一貫うかんぶつサ
池地きと思ひの外さ香水
とろりとするぬるおある一
きを「何んちりの中」のけいもこどはげま
春さいとおおひ付しもとや
兄ちがひ水も酒の名あるが
ト斯打毎ト好ゆふ星ハ大笑ひとぞありふら
滑稽和合人四編上

